

一

次の各問いに答えなさい。

問一 次の各文の―線部のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに直しなさい。

- 1 ヒツゼツに尽くしがたい出来事だった。
- 2 大きなテンシユカクを持つお城。
- 3 イシツブツの届け出をする。
- 4 スイトウ帳に記入する。
- 5 河川の水質調査。
- 6 因果関係を調べる。
- 7 仲良く利益を分配する。
- 8 古い習わしを伝承する。

問二 次のことわざの空欄に入る漢字をあとのア～クから一つ選んで、それぞれ記号で答えなさい。

- 1 だれ石をうがつ
- 2 に交われれば赤くなる
- 3 は体をあらわす
- 4 から出たさび
- 5 枯れ木に

ア 朱^{しゆ} イ 身 ウ 繩 エ 雨 オ 鷹^{たか}

カ 花 キ 友 ク 名

二 次の文章を読んであとの問いに答えなさい。

A 文化というのは、たった一人でつくられる^アものではなく、たくさんの人の中でつくられます。誰か^{だれ}が優れた芸術作品をつくったとしても、周りの人がそれを高く評価しなければ、残っていきません。I、文化というのは、いろいろなことを編み出す人と、それを評価して広めていく人との共同作品なのです。

その意味でも、文化の象徴^{しょうちゆう}である知識・学問・芸術・スキルを学ぶとき、「僕^{ぼく}だけがわかればいい」というのは、正しい文化の伝え方ではないのです。

試験のとき、自分よりセイセキ^②のいいライバルが風邪^{かぜ}をひいて休んだら、しめしめと思う、そんなさもしい考え方ではダメです。授業というのは、先生・生徒の対一の関係で行われる^イべきものではなく、先生は生徒に向かって、「先生は問いを投げかけるけれど、考えるのはみんなだよ。みんなでX^①して考えよう」と言うべきです。

生徒たちがともに学んで、理解していく。よく理解できていない子には誰かが教えてあげて、学びを共同化^Bしていく。仲間に教えることで、その人自身の知識も整理されて、理解が深まります。それが本来の学びのあり方でしょう。

個人的に本を読んだり、テレビを見たりして情報を入手することも大事ですが、それを独り占め^じするのは自分にとっても、相手にとっても損なのです。自分が持っている知識、入手した知識を周囲に伝え、みんなで共有していくことで人間は文化的になっていきます。

II、それを元にギロン^③し合って、友達からも食欲^{どんよく}に学んでいく。そうやってみんなで助け合い、共に賢^{かしこ}くなっていく。わからない人がいたら、放っておかずに、みんなで教えてあげるのです。そういう姿勢が人類を救ってきたわけですから。

学ぶことを、個人主義化してはいけません。自分の知識をひけらかして、変に自慢^{じまん}し合うのではなく、共に語り合う、ときにディスカッションすることが大事です。「ねえねえ、知ってる?」「それはちよつと違うんじゃない?」「いや、そんなことはないよ」などと、仲間同士で言い合いながら知識を共有していく。そういうことを大事にしながら、学んでいってほしいと思います。

学びをまた別の角度からとらえると、困ったときに臨機応変に処理できる力を養う、というふうにも言えるでしょう。

自然・社会が変化すると、持ち合わせの知識では通用しないようなことが起こります。たとえば、これまでのやり方で作物を育てていたけれども、日照りが続いて、ほとんど作物がとれなくなってしまう。そういうことは、これまでの歴史の中で、多くの人々が経験してきたはずです。

そのとき、ある種の危機管理能力・臨機応変力を持っている人は、新しい栽培方法を試してみるとか、今までとは違った作物を育ててみるとか、少しの収穫でもたくさんの人が食べられるような料理を考えると、いろんな知恵を使つて乗り越えることができたはず。

学ぶというのは、既存の知識を頭の中に刷り込んでおくことだけに留まらず、そのときどきに起こる問題に対して、的確かつ臨機応変に対処していくことです。そこでは決まった答えなんてないから、自分でつくり出していかなければなりません。学びの中では、そういう訓練をしていくことも、とても大事なことです。

学校の理科の時間に、さまざまな実験をしたいと思います。授業では、実験結果がわかりきっていることをやるので、あれは本来の実験とは言えないですね。実験というのは本来、まだ答えが見つかっていないもの、ことに対して行うものです。ひとつの条件を変えたとき、どのようなデータが出てくるのかを観察するというときもそうです。自分なりにいろいろと試行錯誤しながら、答えを探し出していく。これが実験の重要な目的のひとつです。

生活の中で、何か困ったことが出てきたとします。Ⅲ、「うちの母ちゃん、入院しちゃったんだよ。どうやってご飯をつくらうかな」というとき、どう切り抜けていくか。そこで自分なりに考えて、料理をつくってみる。何度かつくっているうちに、「考えて工夫すれば何とかなるんだな」ということがわかってくるでしょう。そこで得た自信が、その後の生きる力になっていくわけです。

そういう意味では、いっぱい失敗したほうがいい。うまくいかないという体験は、臨機応変力を鍛えます。勉強でも、部活でも、何でもそうです。失敗したこと自体が、ひとつの大きな学びになります。そういうふうにとらえる視点を、ぜひ大切にしてください。

(汐見稔幸『人生を豊かにする学び方』より)

問一 部①②③のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに直しなさい。

問二 本文中 **I** **III** に入る語句として適切なものを、それぞれあとのア～オから選んで記号で答えなさい。

- ア なぜなら
- イ たとえば
- ウ あるいは
- エ ですから
- オ しかしながら

問三 部A「文化」とありますが、本文において述べられている「文化」や「学び」として**適切でない**ものを、あとのア～エから一つ選んで記号で答えなさい。

- ア 誰かが優れた作品をつくり、周りの人がそれを高く評価することで残っていくもの。
- イ 何かを編み出す人と、それを評価して広めていく人との共同作品と呼べるもの。
- ウ 自分が持っている知識を周囲に伝え、みんなで共有していくことで、できあがるもの。
- エ 誰かに教えてもらったり、学んだりした知識を頭の中に刷り込んでおくことで、できるもの。

問四 本文中 **X** に当てはまる語句として最も適切なものを、その意味を参考にして、あとの**ア**～**エ**から一つ選んで記号で答えなさい。

- ア 共存（ちがう立場のものが、一緒いっしょにいること）
- イ 共通（あることがどれにもあてはまること）
- ウ 共働（力をあわせて仕事をする事）
- エ 共用（一つのものを何人かでいっしょに所有すること）

問五 — 部**B** 「共同化」とありますが、「共同化」と反対の意味で用いられている言葉を本文中より**五字**でぬき出して答えなさい。

問六 本文中**ア**～**ウ****れる**とありますが、その中で用法が異なる「れる」を本文中の**ア**～**ウ**から一つ選んで記号で答えなさい。

問七 — 部**C** 「そのときどきに起こる問題」とありますが、それを詳しく言いかえている部分を、本文中より**二十字**でぬき出して答えなさい。

問八 — 部D「生きる力」とありますが、それはどのような力ですか、本文中の言葉を使って**五十五字以内**で答えなさい。ただし、解答には次の語句を必ず使いなさい。

失敗 問題 知恵

問九 本文の内容を説明したものとして最も適切なものを、あとの**ア～エ**から一つ選んで記号で答えなさい。

- ア 個人的に本を読んで知識を学んだり、テレビを見たりして情報を入手することは不必要なものである。
- イ みんなで助け合い、共に賢くなっていく姿勢は必要であるが、それが人類を救ってきたとは言えない。
- ウ ひとつの条件を変えたとき、出てくるデータがどのようなものを観察することは本来の実験と言える。
- エ 困ったときに臨機応変に処理できる力を養うというのは、能力であって学びとは関係がないものである。

三

次の文章を読んであとの問いに答えなさい。

防具を傍に持って、体育館から出ようとしている三年生の一人に勇は声をかけた。七校対抗戦でBチームの主将を勤めた人だった。彼は勇を振り返って、さつきはまいったな、と眩し気な眼付きをした。勇は勢い込んでいった。

「先輩、都大会の出場を辞退してもらえませんか」

「辞退？ なぜだ」

「僕が代わりに出たいんです」

彼の眼が細められ、開かれたときには険悪な色合いが深まっていた。

「おまえ、のぼせているのか」

「僕は試合に出たいんです」

「誰だってそうだ、おれもだ。そのために春休みまで合宿をしたんだからな」

「でも、新学期からの練習には、ほとんど出ていないではないですか」

三年生の肩が不意に盛り上がりを見せた。殴られるのかもしれないと勇は思った。たとえ殴られても、試合に出ることが可能ならばそれでよかった。自分がまだ未熟なのは分かっていた。石渡という一年生にすら完敗した。だが、彼一人に刺激を求めることよりも、広い、もっと熱い燃焼できるぶつかり合いの中に身を投じてみたい気持の方が強かった。そうしなくてはならないと思って佇んでいた。

「これは鳴島が決めたことだ。主将に文句をつけるのは早すぎる」

「文句じゃないんです。そうしてほしいんです」

「おまえは確かに強くなった。だが、今度の大会はおれにとって最後の公式戦なんだ。おれだって、おまえ以上に出たい」

彼は足早に体育館を出ていった。歩み去っていく姿が横揺れして勇には見えた。あの人は先輩だ、勇は思った。だが、鍛錬することを忘れた人は、単なる先輩で、剣道の先輩ではない。そのとき、勇は三年生になった自分が、どのような道を歩んでいるかとは考えなかった。ちらりと頭をかすめたその思いも、すぐに消えた。竹刀を持ちたがっている、試合に出ようとしている自分しか、そこにはいなかった。

鳴島は金村たち一年生部員数名の中に混じって、洗い場で足を洗っていた。勇は少しきつい眼をして鳴島の名を呼んだ。自分はむきになりすぎているのではないかと考えたが、鳴島の前に立つと、そんなためらいなど消えていった。

B「主将、今度の試合に僕を出して下さい」

笑い顔で振り向いた鳴島は、勇の意外な視線に出会って中途半端な表情に変わった。

「僕は最後の四人に残ったんです。今日は出場選手の審査会だと前にいていたじゃないですか」

「ああ、そうだ」

「どうして僕がはずされるんですか。あれでは、初めから練習試合などないのと同じです」

鳴島は片方の足を手拭いで拭って、上履きに乗せた。

「そうだよ、あれはあくまでも練習試合だ、だから参考にはならん。小林は始めから員数外だ」

「一年生だからですか」

「そうだ」

「でも、主将と副主将を除いた三年生の人たちは、もう剣道をやめているのと同じです」

「おまえが代わりに出れば勝つというのか」

「できれば勝ちたいと思っています」

鳴島は両方の足を拭き終ると、洗い場を離れて、部室に向かって歩き出した。勇は鳴島から半歩遅れるようにして歩く。

「おまえは、おれに對しても、**I**だと本当は言いたいんじゃないのか」

しばらくたって、勇はそうですと返事をした。鳴島は低い声で笑った。朝稽古は、三年生に代わって布施が主に指揮をとっていたのだ。でも主将はまだまです、と勇はいった。生意気なことをいったと思った。だが、ためらいはなかった。鳴島は強く鼻息を吐いた。まだましか、と呟いた。

「三年生にとっては、今度は恐らく最後の試合になる。弱いかもしれないが、一生懸命、丸二年間の成果を生み落すつもりでやるだろう」
「僕もやります」

「おまえにはまだ先がある。何度でも試合に出る機会がある」

「だから、だから今度も出たいんです」

鳴島は足を止めて勇を見下した。この人の胸を抜くのは、そうむずかしいことではない、と勇は思った。

「連中には最後の試合だといっているのがわからないのか」

「それはわかります。受験勉強があるのも知っています。でも、試合を、剣道を、思い出にされたくないんです」

自分だったら、剣道をやめた時点で、剣道のこととは全て忘れてしまうのだろうという予感が、勇にはあった。何かは分からない、不明瞭だ、だが、そのときには、別のものに熱中し、^{③おぼ}溺れきっているのだろうと信じた。

「思い出……」

「僕は今剣道をやっているんだし、金村だってそうです。打ち込んでいます。毎日そればかりです。満足しています。それ以上に夢中で。でも、遊びとも違うんです。いまはそれしかやっていないんです。是非、試合に出たいんです」

D 鳴島は白い顔をして勇を見ていた。なまった風が勇の横顔を舐めた。気色悪い、と勇は思った。

「おまえの気持は分かった。だが、今度の試合は、おれたち三年生が出る。精一杯戦う。おまえは、力一杯応援しろ」

鳴島は大股に歩き去った。校庭に取り残された勇は、くやしきでいっぱいになった。遠ざかっていく鳴島の後姿が涙でぼやけてきた。やがて、黒一色に脹れ上がった瞼にたまった。金村が勇の肩を叩いた。勇は剣道衣の袖で眼をこすった。

(高橋三千綱『九月の空』より)

問一 ―― 部①②③語句の本文中における意味として適切なものをそれぞれあとのア～エから一つ選んで記号で答えなさい。

① のぼせている

ア 集中している

イ ばかにしている

ウ おもいががっている

エ 気にかけている

② あくまでも

ア どこまでも

イ 場合によって

ウ 可能な限り

エ いつも

③ 濡れきっている

ア なまけて過ごしている

イ 不安に思っている

ウ 息苦しく感じている

エ 夢中になっている

問二 本文中 で囲まれた部分において、三年生の気持ちの変化を三つに分けたものとして最も適切なものを、あとのア～オから一つ選んで記号で答えなさい。

ア 賞賛 ↓ 怒り ↓ とまどい

イ 賞賛 ↓ とまどい ↓ 怒り

ウ とまどい ↓ 賞賛 ↓ 怒り

エ あこがれ ↓ 怒り ↓ とまどい

オ 怒り ↓ あこがれ ↓ とまどい

問三 本文中の「すら」と同じ用法の「すら」を使って短文を作りなさい。ただし、解答には主語と述語を必ず書きなさい。

問四 — 部A 「彼」とありますが、「彼」とは誰のことですか、本文中より**八字以内**でぬき出して答えなさい。

問五 — 部B 「主将、今度の試合に僕を出して下さい」とありますが、「勇」はなぜ三年生よりも自分自身の方が試合に出るべきだと考えているのですか、次の空白に合うように、本文中の言葉を使って**七十字以内**で答えなさい。ただし、解答には次の語句を必ず使いなさい。

鍛錬遊び

練習試合に勝ち残っただけでなく、**七十字以内**。

問六 本文中 **I** にあてはまる言葉を、本文中から**十二字**でぬき出して答えなさい。

問七 — 部C 「是非、試合に出たいんです」とありますが、なぜ「勇」は試合に出ることにごだわるのですか。次の空白に合うように、本文中から**三十字**でぬき出してその初めと終わりの**五字**を答えなさい。(句読点も字数に含めます)

勇は、**三十字**と考えているから。

問八 — 部D 「鳴島は白い顔をして勇を見ていた」とありますが、なぜ鳴島は「白い顔」になったのですか、その理由を説明したものと最も適切なものをあとのA~Eから一つ選んで記号で答えなさい。

- ア 勇は自分のことしか考えておらず、何を言っても理解してくれないだろうと悲しい気持ちになっていたから。
- イ 勇のことばに腹を立てているが、年下の勇に対して怒りを爆発させることをがまんしていたから。
- ウ 勇が真面目に剣道と向き合っていることに気づき、他の部員とは違うと実感し、嬉しく思っていたから。
- エ 勇の言っていることが核心を突いている気がして、勇に対して何も言い返すことができなかったから。

問九 — 部X 「勇」・Y 「鳴島」の性格について説明したものととして、それぞれ適切なものをあとのA~Eから一つ選んで記号で答えなさい。

- ア 自らの判断を他者にゆだねてしまい、自分自身では何も決められない性格。
- イ 相手の気持ちに理解をしめしながらも、決めたことをつらぬき通せる性格。
- ウ 自分自身を冷静に判断できるが、一方で気持ちを抑えられずにむきになってしまう性格。
- エ 常に他人と自分を比較してしまい、気後れした態度をとってしまう性格。

問題はこれで終わりです。